

まえがき

日本人の大好物であるエビとバナナについての非常に啓蒙的な本が出て話題になっている。この本はごく身近な商品を取りあげ、消費者である日本人と生産国の底辺労働者、その間に介在する多国籍企業との関係について重要な問題を提起した。われわれは多くの一次産品を消費しながら産地の状況や生産者について考えることが少ないので、この問題提起は貴重である。

日本はあらゆる農・林・水・鉱産品、いわゆる一次産品の一大輸入国である。バナナとエビは、身近な消費財であるが、日本が発展途上国から輸入する一次産品は、石油、天然ガス、金、銅、木材をはじめ、パーム油、天然ゴム、コーヒー、紅茶にいたるまで多数におよんでいる。それぞれの商品は、けっして同質的でなく、それぞれ個性をもっている。そして日本とのかかわりも、単に商品を輸入するだけに止まらず、さまざまな社会・政治的意味合いをもっている。木材輸入

と森林破壊の問題は、その一つの象徴であろう。また南アフリカの金は地下三〇〇〇―四〇〇〇メートルの過酷な労働環境のなかで黒人労働によって地上にもたらされているが、このことを追及していくと、エビやバナナが提起した以上に深刻な問題に突きあたる。

われわれは豊かな国の消費者として、一次産品の生産者の直面する諸問題や彼らの生活に無関心ではいられないが、今いちばんに欠けているものは何かといえば、主観的判断を下す前に必要な「客観的」データであると思われる。この本は、その欠落部分を埋めるために準備されたものである。

本書で取り上げた国際商品としての一次産品は、石油、金、錫、銅、天然ゴム、ジュート、紅茶、コーヒー、砂糖の一品目である。これらの品目の選択は二つの基準で行なわれた。即ち、アジアの発展途上国で生産されており、日本が大量に輸入している品目である。もとより、これらの商品はアジア以外でも生産されている。ただ、われわれの関心が日本とアジアの発展途上国とのかかわりにあったために、このような選択になったわけである。ただ、選択基準にかかわらずなく、これら一次産品が国際商品である以上、そのもつ経済・社会・政治的インパクトは、単に日本やアジアの発展途上国の範囲に止まることなくグローバルであることは当然である。

さて、すでに述べたように、本書の主たる目的は、国際商品としての一次産品に関する基礎的

データを提供することにある。各章は、各商品の専門家によって最新のデータをもとに書かれたものであるが、主観的分析より客観的事実関係の提示にウェイトが置かれている。第Ⅰ章に、一次産品問題に対するわれわれの見方をのせた。そうすることによって、第Ⅱ章以下の知識が有機的なつながりをもつてくると考えたしだいである。

〈参考文献〉

- (1) 鶴見良行『バナナと日本人』、岩波新書、一九八二年。村井吉敬『エビと日本人』、岩波新書、一九八九年。
- (2) 詳細な分析は、平島成望編『一次産品問題の新展開——情報化と需要変化への対応』、アジア経済研究所、一九八九年を参照されたい。

一九九〇年二月

編者